

LONDON ロンドン

宗教の今をルポしたデ・ケイザー

菅伸子

「アメリカはすぐ資本主義的なので、生きるために一生頑張らなければならぬ。もし、仕事や金や家を失ったら、神に祈るしかない」

と語るのは、カール・デ・ケイザー氏(33)。

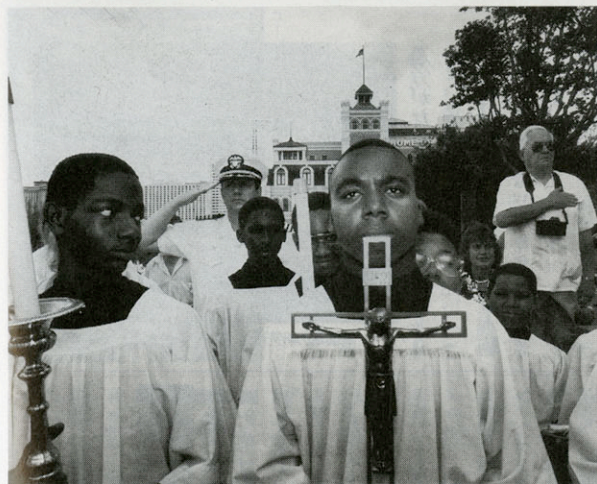
中背でがっしりした体格。オランダ語とよく似たフラマン語を母国語とするベルギー人。ブリュッセルの北西にあるゲントを本拠地としている。

インドや、社会主義が崩壊する

前のソ連などに長期滞在して、撮影を行ったこともある。現在、写真家集団「マグナム・フォトス」の最年少準会員だ。

91年夏から約1年間かけて、アメリカのキリスト教をテーマに、妻子と一緒にキャンピングカーで、写真を撮影して回った。車の走行距離は4万8000キロ。35州にわたる300の教会を訪れた。

そのとき撮影した1万20000点のなかから選ばれた約40点が、ロンドンのフォトグラフィアーズ・ギ



カール・デ・ケイザー「神はアメリカを祝福したもうを歌う ニューオーリンズ」(1990)

ヤラリーで8月22日まで展示され、反響を呼んだ。「ずっと宗教に関心を持っていて。国全体、社会全体、大衆に影響を与えるものに興味があるから」というデ・ケイザーは、ベルギーの雑誌に連載されたアメリカの新興宗教の



カール・デ・ケイザー「神の預言」という名の教会での伝道集会 フロリダ(1991)

特集記事を見て触発された。

そこには、テレビで伝道する人たちや、まるでデイズ・ニラランドのような宗教テーマパークの様子が載っていた。

アメリカ大使館や図書館で、キリスト教系の宗教団体を洗い出し、600の団体に手紙を出した。その結果、自宅には膨大な数の聖書やパンフレットが送られてきた。この資料をもとに旅行計画を立て、あとは現地テレビや雑誌を見て、電話をかけて交渉しては、教会を訪れた。

アメリカ行きは自費でまかなった。事前にしっかり計画を立てたつもりだったが、電話代に1万円が

が消え、3カ月で資金は底をついた。途方にくれているところに、先に出版したソ連の写真集と、撮影中のアメリカの宗教プロジェクトに対して、「ユージン・スミス賞」が贈られ、難を切り抜けた。

今回、展示さ

れたのは、プールのなかで集団洗礼を受ける「エホバの証人」の信者たち、伝道者ビリー・グラハムと会場に集まった信者たち、大きな木の十字架を抱えて浜辺を伝道して歩く男などで、センチシヨナルな写真は意図的に外されているように見える。

撮影には35ミリカメラとフジのパノラミック・カメラが併用されている。さまざまな事柄を一枚の写真に取り込んだパノラマ写真が実に効果的だ。

写真を見ていて気づくのは、信者の表情がみな一樣



カール・デ・ケイザー「クリスマス劇で天使の扮装をする人たち フロリダの長老派教会」(1990)